

『土左日記』 一月九日

原 由来恵

はじめに

平成二七年度本学大学院講義（中古文学特殊講義Ⅴ）において、『土左日記^{（注1）}』を通読してきた。講義目的は、『土左日記』に込められた、作者紀貫之の作品生成における目的達成の意味と手法、つまりストラテジーを各期日ごとのテキストから読み解くというものである。その成果の一端は昨年度の大学紀要に『土左日記』一月七日^{（注2）}に掲載公表した。その拙稿では、「一月七日」に記載されたテキストには、「歌物語」的テキスト構造に顕れる作品の虚構性と、言語遊戯という視座が認められることを論じた。その上で「一月七日」の特質を踏まえて、作品に込められた真意を、①歌物語的構造②言語遊戯③歌論志向という三つの視点から読み解き、『土左日記』の基底には「紀貫之の文学における紀氏の回生」といった意図が込められた可能性があることを作品形成のコンテキストとして導いた。

本稿では、『土左日記』の「歌物語」的テキスト構造に顕れる虚構性を踏まえつつ、さらに今年度の講義で得た、作者紀貫之のテキスト構想の表現とその根幹となるものを探求してみたい。

『土左日記』の日次の記事は、作品が主張するように「日記」という立場として実録的に書かれている。しかしそこに登

場する記載事項を見ると、歌論的内容等が記載の事象として選ばれており、なぜその場面を日次の記事として選択したのか、いささか疑問が生じる。このような特徴を作品が持ったためか、これまでの研究では、

○自筆本に準ずる価値○仮名文日記○女性仮託○亡き愛児への思い

○歌数と歌論展開○土佐から帰京までの紀行状況○『伊勢物語』との連関

といったことが示されてきた。^(注3)

また昨今では、神田龍身氏や東原伸明氏がテキストのエクリチュールに視座をおき、テキストにおける表現方法には、平安時代における文化的意識である「優劣」の意識などが、テキスト形成に見られると指摘されてきた。^(注4)そして本稿で取り扱う「一月九日」の条についても、いくつかの論を提示されている。

残念ながら、本論執筆時の講義では、作品全体の読破には至っていない。

しかしここまでの輪読からも多くの成果を、受講した二松学舎大学研究科の院生、大村美紗氏・矢崎麻由氏及び科目等履修生の高木究氏と見いだしている。そこで本論では、「二月九日」のテキストから見いだせる『土左日記』のストラテジー、つまりは「紀氏の回生」とともに、テキストの裏面に託された作者紀貫之の思いを、

①表現の対称性

②登場歌の役割とテキスト構成における言語遊戯

③記事の裏面

という三つの視点から私見として提示する。

本講義は、青谿書屋本^(注5)を底本とし、翻刻及び本文検討も行っている。そのため本稿における『土左日記』テキスト引用本文は、その制定本文を使用する。

一、一月九日

『土左日記』「一月九日」は次の通りである。なお、論を展開するにあたり、テキストには便宜上アルファベット及び傍線を付した。

A 九日つとめて、大湊より奈半の泊を追はむとて、こぎいでけり。

これかれ互ひに、国の境の内はとて見送りに来る人あまたが中に、藤原ときざね、橘すゑひら、長谷部ゆきまさらなむ、御館より出でたうびし日より、ここかしこに追ひ来る。この人々ぞ志ある人なりける。この人々の深き志は、この海にも劣らざるべし。これより今はこぎ離れて行く。

これを見送らむとてぞ、この人どもは追ひ来ける。

かくてこぎ行くまにまに、

海のほとりに留まれる人も遠くなりぬ。

船の人も見えずなりぬ。

岸にも言ふことあるべし。

船にも思ふことあれど、かひなし。

かかれど、この歌をひとりごとにしてやみぬ。

思ひやる心は海を渡れどもふみしなければ知らずやあるらむ

B かくて、宇多の松原を行き過ぐ。その松の数幾そばく、幾千年経たりと知らず。

もどごとに波うち寄せ、枝ごとに鶴ぞ飛び通ふ。おもしろしと見るに耐へずして、船人の詠める歌、

見渡せば松の末ごとに住む鶴は千代のどちとぞ思ふべらなる

とや。この歌は、所を見るに、えまさらず。

C かくあるを見つつこぎ行くまにまに、山も海も皆暮れ、夜ふけて、西東も見えずして、天氣のこと、楫取りの心に任せつ。男も慣らはぬは、いとも心細し。まして、女は船底に頭をつきあてて、音をのみぞ泣く。かく思へば、船子・楫取りは、舟唄歌ひて、なにとぞ思へらず。その歌ふ唄は、

a 春の野にてぞ音をば泣く。わがすすきに手切る切る摘んだる菜を、

親やまぼるらむ、姑や食ふらむ。帰らや。

b よむべのうなぬもがな、錢こはむ。そらごとをして、おぎのりわざして、

錢も持て来ず、おのれだに来ず。

これならず多かれども、書かず。これらを人の笑ふを聞きて、海は荒るれども、心は少しなぎぬ。かく行き暮らして、泊に至りて、翁人ひとり、専女ひとり、あるが中にこち悪しみして、物もものしたばで、ひそまりぬ。

さて、この「一月九日」の記事はAとCと付したように、この記事はA「志ある人」たちとの別れ、B舟からの情景と帰京への願い、そしてCの暮れてからの海上の不安と楫取りたちの舟唄。といった三部構成で記載されている。

この記事については既に諸先学も、Aの箇所では他の記事と合わせて作品の表現の対称性を指摘している。またBでは、「宇多の松原」の表記に対して、実地の推定や歌枕的観点、そして実景では不可能な和歌とした屏風歌的技法の指摘などがなされてきた。さらにCに関しては、「舟唄」の解釈を試みている。しかしこの「一月九日」の記事の三部構成が、あまりにも独立して読める為なのか、その一日の記述としての連関を通したテキスト構造や作品内における位置づけを明確にしているものは残念ながら見あたらない。とは言うものの、やはりこの記事は、一日中の出来事としてテキストに描かれて

いるものである。また一方で、『土左日記』という作品の一項目であり、つまりは次の目次へと続くからこそその日記である。そのため、やはり九日全体のテキスト構想を見定めなければならない。

そのことを踏まえ、あらためて本文に帰ると三つの疑問が生じる。一つ目は、なぜ紀貫之は「志」と言う言葉を使用していいのか。そして女が記した日記としながら、その「志」を評価させ、相手を思い遣りながらも、別れの現実を受け止める「ひとりごち」の歌を独詠させたのか。第二に、景色の方が勝るとしながら、なぜ歌論展開をするわけでもないのに情景歌を載せたのか。そして三点目は舟唄は他にも多くあったとしながらも、この二つを選択掲載させたのかである。そこでこれらの問題も意識しながら、まずは表現の対称性に着目してこの記事を読んでみたい。

二、表現の対称性

前掲のテキストを見ると、Aでは傍線を付したとおり、岸边と海上の船それぞれからの描写が対称的になされている。

ここかしこに追ひ来る。(略)

これより今はこぎ離れて行く。

これを見送らむとぞ、この人どもは追ひ来ける。

かくてこぎ行くまにまに、

海のほとりに留まれる人も遠くなりぬ。

船の人も見えずなりぬ。

岸にも言ふことあるべし。

船にも思ふことあれど、かひなし。

(略) この歌をひとりごとにしてやみぬ

そして、その構図は、

ここかしこに追ひ来る

(岸——岸边の男達の思い)

離れる (岸——岸からの視点)

追ひ来ける (舟——海からの視点)

留まれる人 (岸)

舟の人 (舟)

岸にも (岸)

舟にも (舟)

この歌をひとりごとにしてやみぬ (舟——舟の女の思い)

となっている。この絵に描いたような対立構造に対して、萩谷朴をはじめとした先行研究は、屏風歌的手法を指摘している。^(注6)確かに異論はないが、ここで踏まえたのが、海よりも深い「志」と評された未詳の男性陣たちと、諦めに似た別れの独詠をした一人の書き手とする女の対比である。つまり、これらの人物配置も巧みな対立構造になっているのである。言い換えれば一枚の絵のような情景に留まらず、テキストはさらなる対比を生み出していると言っても過言ではないだろう。

そして本文Bのまるで屏風絵の説明のような風景へと継続される。そこには謎の地名「宇多の松原」等とともに、景色の描写がなされていく。しかしそこに映し出された情景は、先学が指摘の通り、現実とはいささか遠いものとなっている。それがある人が歌に読み込んだが、その歌に対して実景の素晴らしさは表現できないとする。

ここでは、先述したAの情景を超える言葉に対して、言葉をも超える情景といったAに対するBの対称的立ち位置を見る

ことができる。

さて、そのBの明るく美しい昼の情景から、Cの暮れた夜の海上での不安が、視覚描写から聴覚・体感描写へと変化した内容として記される。

これまでとはうって変わり、主体は舟の楫を担う楫取りたちに移行する。ここでは絵画的美しさはなく、不安と船酔いといった現実的な状況が展開するのである。

つまり次に示す通り、Aの絵画的構図と人の志、Bの美的情景描写とは対称的な現実感がCに集約される。また日が暮れてから、日記を書いたとされる女（貫之）との応対する対象者がこれまで共通の志であった人々から、楫取りといった相違の心を持つ者とのやりとりへと、対称的に取り上げられているといえる。

A 岸と舟（海上） 絵画的構図と心情

共通の志

B 岸 絵画的構図における情景描写

C 舟（海上） 現実的状况描写

相違の心

「一月九日」は、全体が岸と舟（海上）の主体の視線による対称と、絵画的構図に対して心情・実景さらには現実的描写における表現の対称性によって構成されているといえよう。

三、登場歌の役割とテキスト構成における言語遊戯

さて、ここまで「一月九日」のテキストが、対称性の構図で編まれていることを捉えてきた。ここでは、さらにもう一つ

の作品構成における重要な要素を提示してみたい。それは、この条の記述に登場する和歌及びその役割である。登場歌は

A 思ひやる心は海を渡れどもふみしなければ知らずやあるらむ

B 見渡せば松の末ごとに住む鶴は千代のどちとぞ思ふべらなる

C

a 春の野にてぞ音をば泣く。わがすすきに手切る切る摘んだる菜を、

親やまぼるらむ、姑や食ふらむ。帰らや。

b よむべのうなあもがな、銭こはむ。そらごとをして、おぎのりわざして、

銭も持て来ず、おのれだに来ず。

となつてゐる。

A に記載された和歌は、日記の書き手とされる女の独詠歌である。B に記されたのは、景色の素晴らしさに自ずと誰かが詠んだとする歌。C は女をはじめとした帰京する一行が日が暮れて不安になっている状況の中で、楫取りや船子たちが謡う舟唄である。

さて、ここで注目すべきは、いずれもの歌をなぜ掲載したのかという点である。一見それらがそこに登場することは何ら不自然ではないように思える。しかし、和歌の詠み手や歌に続く評を改めてみると、やはりいささかの疑問を持たざるをえない。

A はこの日記を記載したとする女の独詠である。最後まで見送りにきた「志深き人たち」との別れへの哀愁を思い断つために、ひとりごととして詠んだとされる。しかし追ってきた人々は全て前国守を慕い追ってきた男性である。この日記の書

き手として登場した女の身として詠むには、いささか不釣合いである。前国守としての歌は、前掲記事にも登場している。それにも関わらず女に詠ませたという意味は、追ってきた人々に特化したものではないと受け止められる。むしろ対象を明確にせず第三者的に詠ませることで、歌そのものにある「思ふ心がある者同士でさへ距離がある場合、文などを通してかろうじて通じあえる」ということを強調する意図と読むことができよう。後半の楫取りたちとの、近くにいながら相容れない心の距離感が、このA掲載歌によって誇張されている。換言するならば、テキスト構成において、コンテキストの心の距離と位置の距離の反比例を示す役割を担っているといえる。

さてBの歌は、本文に「この歌は、所を見るに、えまさらず。」とあるように実景の素晴らしさの強調といった役割が認められる。ただし、先学も指摘しているが、鶴が実際の情景にいたのかどうかについては、疑うところである。そもそも「宇多の松原」が未詳であり、航路上にもそれらしき風景を見いだすことが難しい。そのような中で、何を示そうとしたのかである。

三部構成のCの場面は日も暮れ、あたりが何も見えず男でさえも不安を募らせる。つまり、Bでの情景の素晴らしさが際だてば際だつほど、うって変わった夜の闇における不安感が、いやでも際だつこととなる。昼の岸辺の状況と暗闇の海上の心情の差が、コントラストとなって描かれている。その描写の一端をB掲載歌は果たしている。

では、Cの舟唄である。楫取りたちによる唄は「これならず多かれども、書かず。」とあるように、他の詞章もあつたと考えられる。しかし敢えてこの箇所を作品は選択し記したということである。その意識は、記載箇所が作品構成に言語遊戯として使用するためであつたといえる。

さて、再度前掲Cの本文にかえる。

かくあるを見つつこぎ行くまにまに、山も海も皆暮れ、夜ふけて、西東も見えずして、天氣のこと、楫取りの心に任せ

つ。をのこも慣らはぬは、いとも心細し。まして、女は船底に頭をつきあてて、音をのみぞ泣く。かく思へば、船子・楫取りは、舟唄歌ひて、なにとも思へらず。その歌ふ唄は、

a 春の野にてぞ音をば泣く。わがすすきに手切る切る摘んだる菜を、

親やまぼるらむ、姑や食ふらむ。帰らや。

b よむべのうなぬもがな、銭こはむ。そらごとをして、おぎのりわざして、

銭も持て来ず、おのれだに来ず。

これならず多かれども、書かず。これらを人の笑ふを聞きて、海は荒るれども、心はしばしなぎぬ。かく行き暮らして、泊に至りて、翁人ひとり、専女ひとり、あるが中にこち悪しみして、物もものしたばで、ひそまりぬ。

波線部 a に着目すると、本文 C に付した波線部と対応していることを見ることができる。その呼応した関係を表にまとめると次のようになる。

テキスト	舟歌
音のみぞ泣く 翁人ひとり、 専女ひとり、 あるが中に こち悪しみして、 物もものしたばで	音をば泣く 親やまぼるらむ 姑や食ふらむ。 帰らや

これらが示す通り、舟歌aはテキストCの構成に深く関わっているといえよう。船底に頭をつけて「音をのみぞ泣く」女達の様子と、「音をば泣く」の類似。そしてさらに、記事の最後に登場する、翁と専女(注)の船酔いで何も食べられない状況は、舟唄での食べる親と姑とは対称的行動で描かれているのである。つまり、ここには、舟唄とテキストが言語遊戯によって構成がなされているといえる。

では、舟唄bの箇所役割は何か。それは「一月十一日」の記事を暗示していると思われる。

十日。今日は、この奈半の泊にとまりぬ。

十一日。暁に船を出だして、室津を追ふ。人皆まだ寝たれば、海のありやうも見えず。ただ月を見てぞ、西東をば知りける。かかる間に、皆夜明けて、手洗ひ、例のことどもして、昼になりぬ。

今し、羽根といふ所に来ぬ。若き童、この所の名を聞きて、「羽根といふ所は、鳥の羽根のやうにやある」と言ふ。まだ幼き童の言なれば、人々笑ふ時に、ありける女童なむ、この歌をよめる、

まことにて名に聞く所羽根ならば飛ぶがごとくに都へもがな

とぞ言へる。男も女も、いかで、とく京へもがなと思ふ心あれば、この歌よしとはあらねど、げにと思ひて、人々忘れず。この羽根といふところ問ふ童のついでにぞ、また昔へ人を思ひいでて、いづれの時にか忘る。今日はまして母の悲しがらるることは、下りし時の人の数足らねば、古歌に、「数は足らでぞ帰るべらなる」といふことを思ひいでて、人のよめる、

世の中に思ひやれども子を恋ふる思ひにまさる思ひなきかな
と言ひつつなむ。

十一日のテキストによれば、十日はそのまま奈半へ泊まり、翌十一日の晩に室津に向けて出航している。その十一日の記事には、途中の「羽根」という場所において、「ハネ」という語感から着想を得た女童が歌を詠むのであるが、その歌が記されている。またさらに、帰京に際して、土佐国で亡くなり、帰らぬ者となった子への情愛と悲哀が描かれている。

さて、そのことを踏まえて舟歌bに着目すると、二つの似通う意味合いを持つ語を見いだすことができる。それは「うなぬ」と「帰らず」である。「うなぬ」は女の子を示す語であり、さらにその「うなぬ」が「おのれだに來ず」と戻ってこないことを舟歌は歌うのである。それはまさに、十一日に記される「戻らない子」を想起させる唄であるとも言えなくはないだろう。

ともあれ「一月九日」に登場する和歌と舟唄には、テキスト構想において、その内容の強調効果や、言語遊戯におけるプロット作成、さらにはその先の記事への暗示といった役割があるといえよう。

四、記事の裏面

前述してきた「一月九日」における主体の視点による対称性と、掲載歌の役割を鑑みたとき、『土佐日記』が、やはりただの日次の記事ではないことを痛感させる。言うならば。選び抜かれた言葉の集約を持ってテキストの構成をしていたと、読み手に改めて気づかせる。

しかしそれならば、九日のテキストは、なぜこのような内容をプロットとして組み込んだのであろうか。

ここでは、紀貫之の帰京時における都の政治的状況と、紀貫之を取り巻く環境から、テキストの裏面として、一つの読みを試見として提示してみたい。

まず、九日の本文において、着目しておきたい二つの語がある。一つは「志・心」二つ目は「宇多の松原」である。

「志・心」は写本にも漢字表記されており、おそらくは意識して使用されたと見ることが穏当であろう。では、追いかけて来た三人の未詳の人物に対しての評価として「海よりも深い」と使用し、さらに「思い合う心」として表現がなされている。一方で楯取りに対しても「心」は使われるが、そこでは、不安と相容れない心として描かれる。何故離れる人々に対して、ここまで「志」を強調し、前掲の通りに、書き手らしき女に、諦観にも似た、通い合う心と距離を表す歌を詠ませたのだろうか。

またそれに対して、楯取りの心のままの状況には、周囲の见えない進む道への不安を発動させる象徴の一つとして扱ったのであろうか。

そして、その见えない不安をコントラストとして照射するかのような素晴らしい光景の「宇多の松原」は何を指し示すのであろうか。

既知の通り、紀貫之が土佐守の任を解かれ、帰京を目指したのは、承平四年（九三四）十二月二十一日である。土佐守に任じられたのが延長八年（九三〇）で、都に着いたのは承平五年（九三五）であり、国守としても長い約六年の間、都と離れた遠国の地にいたことになる。この六年間の間に、醍醐天皇が延長八年（九三〇）九月二十九日に、宇多法皇が翌年の承平元年（九三一）七月十九日に崩御された。またその二年後の承平三年（九三三）二月十八日に藤原兼輔が薨去している。つまり、紀貫之の才を認めていた三人が、紀貫之が都を離れている中で世を去っている。

先学も述べているように、この紀貫之の理解者達の死は、紀貫之にとって大きな衝撃であったと推するのに難くない。しかしそれだけに終わるものではなかったのではないだろうか。

この訃報は遠国土佐で知るのである。国風文化の礎を築き、さらにそれを確立した天皇・法皇がお隠れになったのにも関わらず、遠い地にいる貫之は、近くで悲しむこともできず、また、変化して行くであろう政治構造や時代の変化も、己のまなざしで確認することはできないのである。つまり、焦燥感と不安感、见えないことへの恐れは、人一倍感じていたのでは

なからうか。まして、交友のあつた藤原兼輔でも貫之の帰京前に亡くなるのである。

このような状況下に対して六年ぶりに踏む都の地への思いは、果たして喜びだけであつたのだろうか。むしろ帰京の嬉しさの中にも大きな将来への不安感が増幅していったと思われる。

さて、ここまで述べたコンテクストを踏まえた時、土佐から都への航路であるが、その裏面に伏線として土佐守に任ぜられ旅立つてからの思いを見いだしてしまうのは行き過ぎであらうか。

「宇多の松原」は「うたのまつばら」とも読める。宇多天皇に始まつた和歌復興のありようと、それを継承し紀貫之自身も編纂に関わり、作成された『古今和歌集』の時代の華やかさを、暗に仄めかしているのではなからうか。

しかし、その時代も変わり状況も何も見えない不安感。

そのような中で、『土佐日記』で描かれる土佐国に來たときには生きていた我が子。その子の存在に対する虚実の有無はここでは問わないが、作品同様に、土佐へ赴任する際は生きていた人々が、都へ戻つても居ないという現実と、重なり合う。

「志」を持ちながらも文がなければ便りがなければ伝わらない。

その「志」は紀貫之自身の「志」つまりは「宇多」「うた」への強い意志でもあつたのではなからうか。それが帰京後の『新撰和歌集』や『土佐日記』の原動力にもなつていたと思えてならない。

「一月九日」は、いよいよ本格的に帰京への意識が高まる奈半の泊において、都への帰路につく嬉しさを、歌物語的手法及び言語遊戯によつて目次として記されながらも、そのテクストの裏面には、大きな不安、そして改めての「志」への覚悟を、忍ばせたと読むことができる。

おわりに

「二月九日」の記事には、テクストを対称性に組ませ、絵画的美と現実感を、岸と船（海上）を場面設定におき、その状況を巧みに機能させていた。また和歌や舟唄を、ただの心情表現や珍しいものの紹介とはせずに、それぞれに役割を担わせ言語遊戯を踏まえた記事の構成を編み出していた。そして、その考え抜かれた構想からは、裏面に帰京に伴うコンテクストの存在と作者の「志」の表象の狙いといった貫之コードがストラテジーとしてあった、という私見も述べて本稿を閉じる。

注記

（注1）講義の底本とした青谿書屋本（新典社影印叢書『土左日記』）には、『土左日記』とあるため、本稿ではそのまま表記を踏襲した。

（注2）二松学舎大学論集58

（注3）日本語学からのアプローチ、作品の虚構論、紀行文学としての帰京までの旅程考察、『古今和歌集』『古今和歌六帖』『貫之集』などのと掲載和歌との対照、『伊勢物語』関連記事にみる作者説などが行われている。

また、作品の本質については、「女性に仮託した仮名文日記」とした理由解明を起点に、萩谷朴の『土左日記全注釈』をはじめ、作品の読者想定から、貴族子女へのテクニスト的役割・亡き愛児への思いを漢文という制約をはずした仮名による自由表現の試み・コンテクストから見た作者とその援助者たちとの死別影響論といったものが示されてきた。

（注4）東原伸明『土左日記虚構論』初期散文学の生成と国風文化』（武蔵野書院・二〇一五、六、七）

（注5）なお、既知のとおり『土左日記』は、平安期成立の文学作品としては貴重な、作者紀貫之自筆本に準じるとするテクニストの青谿書屋本が存する。そのため本講義でも、この青谿書屋本を底本としてきた。引用テクニストは、底本とした青谿書屋本を翻刻校訂したものとする。

（注6）萩谷朴『土左日記全注釈』（角川書店・一九九〇、九、一二）

（注7）ここでの「翁」「専女」は老人・老女として解することが多い。また、その船の中でこの二人を示すのは前国守及びその妻との解釈もある。ただし明らかではない。あくまでも、「翁と専女」で一对としてここでは使用されていると見ることはできる。

（注8）受講者である大村美紗・矢崎麻由・高木究とともに、講義内における『土左日記』各記日の発表等を通して、作品の構成には、読むべき人が読めば、理解しうるといった、紀貫之コードがはりめぐらされ、「紀氏の回生」を暗示させる側面を持っていたという試見を見出した。

